

令和6年度 梅田小学校 校内研究成果報告

大田区立梅田小学校
校長 金高 俊哉

1 研究テーマ 「単元内自由進度学習の単元開発

～目標に向かって自ら学び続ける児童の育成～

2 研究主題設定の理由

昨年度本校でこれまでの研究成果を活用しながら、授業改善を図るために、新学習指導要領に則って、「令和の日本型学校教育」を研究していくこととした。「令和の日本型学校教育」の重要なキーワードとして、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」がある。そこで、個別最適な学びと、協働的な学びの実現をテーマとして研究すすめることとした。今年度は、授業改善、授業設計を大きな狙いとして、児童が主体的に学習に取り組むためのファクター（要素）を探し、授業（単元）を開発することとした。

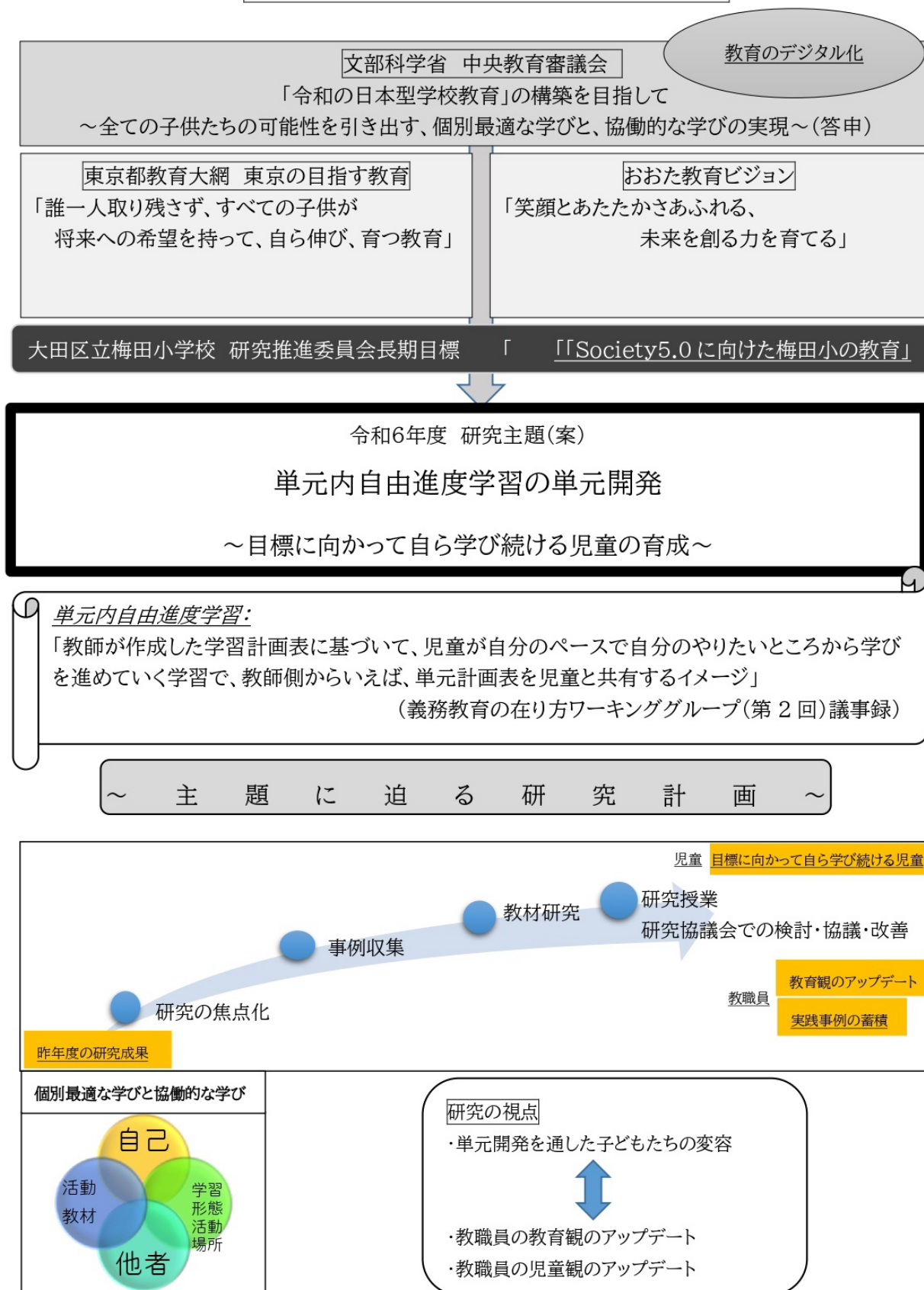
その結果、いくつかのファクターを見付け、授業改善のきっかけとなった。今年度は、その成果をもとに児童が目標に向かって自ら学び続けることができるようになるように「単元内自由進度学習」の単元開発に臨み、授業改善を図るとともに教師の役割についても研究することとした。

3 研究計画

	日程	内容
研究全体会①	4月26日 (水)	今年度の研究について
研究全体会②	6月11日 (水)	単元内自由進度学習の先行事例から、本校の考える自由進度学習について共通理解を図る。
研究全体会③	7月17日 (水)	授業の視点や研究主題などの共通認識を語る。
研究全体会④	9月24日 (火)	実践授業① (6年生 音楽科) 講師 放送大学 准教授 小林 祐紀先生
研究全体会⑤	10月30日 (水)	実践授業② (2年生 算数科) 講師 柏市立大津が丘第一小学校 校長 佐和 伸明先生
研究全体会⑥	11月6日 (水)	実践授業③ (5年生 社会科) 講師 放送大学 准教授 小林 祐紀先生
研究全体会⑦	12月4日 (水)	実践授業④ (3年生 理科) 講師 放送大学 准教授 小林 祐紀先生
研究全体会⑧	1月22日 (木)	実践授業⑤ (4年生 理科) 講師 船橋市立宮本小学校 校長 秋元 大輔先生
研究全体会⑨	3月4日 (火)	研究のまとめと次年度の研究について

4 研究構想図

大田区立梅田小学校 令和6年度研究構想図



5 研究内容

単元内自由進度というものが、どのような授業スタイルなのか、よくわかっていない部分も多かったので、校内で共通の認識をもつための時間とした。先進的な取り組みをしている学校の実践例や書籍などから、単元内自由進度学習についての先行研究を行った。その結果、教師が単元のねらいや児童に身につけさせたい知識や技能などを理解したうえで、単元計画を児童と共有し、単元の一部ないし、全部を児童が自分のペースややり方で学習を進める「自己選択型学習」を中心に授業設計を考えていくことにした。

実践授業は、1年生を除く5学年で行った。(1年生については、3学期に分科会授業として授業を公開した)

第1回は音楽科で6年生の授業を行った。音楽科では、合奏の題材で授業を計画したが、児童の技能面における個人差を考えた上で、児童が主体的かつ自主的に学習に取り組めるように・技能を身に付けるための時間の設定 ・練習場所の確保 ・個の能力に応じた楽譜の準備 ・選択できる豊富な楽器の種類 ・ゴールを見据えた題材指導計画などの手立てを考えた。

児童は、自分にあった楽譜を選択し、自分のやりたい楽器や練習場所を選択するなど、自己決定をしながら意欲的に練習に取り組んでいた。「自己決定」が児童の意欲に大きな影響があることを改めて示す結果となった。

第2回は、2年生が算数の「かけ算」の単元で授業を行った。2年生は、主題に迫るために児童に身につけさせたい力として、1 見通す力 2 実行する力 3 振り返る力 の3点を掲げ、この力を付けるための単元構成を考えた。また、児童に学ぶためのロードマップ(学習計画)を提示し、児童が自立して学ぶ力を育成しようとした。

児童は自分のペースで九九の習得に励み、目標を達成した児童は、それぞれの段の「歌作り」をしてタブレットに録音するなど表現方法も工夫していた。

第3回は、5年生が社会の「工業生産」の単元で授業を行った。これまでの実践を生かし、2年生が提案した、1 見通す力 2 実行する力 3 振り返る力を継承し、それぞれの手立てを考えた。また、児童が「知識・思考を整理・深める」ことができるための手立てとして、児童が表現することにウェイトを置き、「話し方」のスキルや「聴き方(メモの取り方)」などのスキルを児童に身につけさせることをねらった。

第4回は、3年生が理科の「じしゃくのせいしつ」の単元で授業を行った。3年生もこれまでの3つの力の育成を目指し、学年独自で、「学びの扉」「学びの時計」「学びのおきて」などの掲示物を児童に示すことで、学習者の現在地と課題、時間の使い方、学習を進める上で欠かさず取り組む内容を常に意識できるように工夫した。児童は、磁石の性質を利用した様々な遊びを体験する中で、磁石の性質について、意欲的に探究し考えている様子が伺えた。

第5回は、4年生が理科の「ものの体積と温度」の単元で授業を行った。4年生は、これまでの各学年で行った実証授業で得られた成果を踏まえて、単元開発を行った。見通す力を育成する手立てとしては、「学びロードマップ」という単元すべてを見通す資料を掲示。児童にゴールと学びの現在地、学び方を知らせた。実行する力を育成する手立てとして「学びプラン」を活用した。ここでは、児童の学び方についてのめあてについても言及しており、それぞれの個々の学びを支援するようにした。また、児童自身が選択可能な学びの場を設定し、表現方法と実験方法や使用器具を選択できるようにした。実験の形態も個人でもペア・グループでも可能にした。学習環境も工夫し、児童がいつでもサイトや動画を参照できるよう、リンクを貼り、予想の手掛かりや実験方法を自分で調べられるようにした。また、児童が実験に使用する可能性がある器具等を可能な範囲で種類・

数ともに多く準備しておくようにした。

振り返る力を育成する手立てとしては、ルーブリック評価を設定し、活用した。学習者としてどうありたいかという学び方の視点から、児童がルーブリック評価を考えるようにした。また、振り返り時には、本單元においては、「学びプラン」で考えた自分のめあてについて振り返らせ、次の学習のめあてにつなげていくというように、振り返りの視点を学び方に焦点化した。自分のめあてと振り返りの往還により、児童の自己調整を促し、自立した学習者となるような手立てをとった

このような細やかな手立てをとることにより、児童は、主体的に自分の選んだ実験方法で、実験をし、その結果を考察することで、自分なりの結論に達し、学習に対する満足感を売ることができていた。

6 研究の成果と課題

1年間の研究を通して、自立した学習者として児童に身に付けさせたい力として、「見通す力」「実行する力」「振り返る力」の3つの力を掲げ、これらが身に付いた自立した学習者とは、

- ① 自ら課題をもち、学習計画を立てる子
- ② 学びのプロセスを自分で回す子
- ③ 自らの学びを振り返り、自己調整する子

と定義づけることができた。また、それぞれの目指す児童像に向かわせるために教師はそれぞれに対して以下のような手立てが必要であることが明らかとなった。

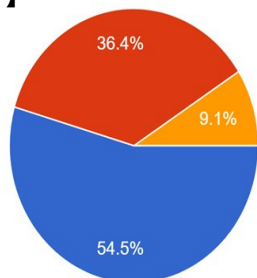
- ① 単元導入・問題提示の工夫 学習問題づくり（各事象の提示の工夫等）学習計画表（学びの手引き）の開発 スプレッドシートの活用
- ② 学びのプロセスを意識するための学習材の開発 児童同士で学び合い、思考を深めるための工夫 教師の役割変化（インストラクター ファシリテーター よい学び手の先達）
- ③ 振り返りの視点の明示 学習方法、自己調整の方法の提示 次時への見通し 振り返りの相互参照（スプレッドシートの活用） 教師の適切なフィードバック

教師の授業組み立ての意識にも変化が見られた。以下のグラフでもわかるように、自分で調べたり考えたりする探究的な学習形態を用いる場合が増えている。このほか、

7. 自分で調べたり考えたりする

33件の回答

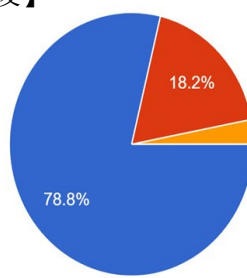
【事前】



7. 自分で調べたり考えたりする

33件の回答

【事後】



- よく行っている
- ときどき行っている
- あまり行っていない
- まったく行っていない

- ・ 振り返り活動が増える。
- ・ ペア活動、グループ活動を意識的に行っている。
- ・ 児童が習熟や進度に合った方法を自分で選んで学習している。

など、これまでの授業スタイルが、変化していることが明らかとなり、授業改善が進んでいることが伺えた。

このような一定の成果を得ることはできたが、課題もたくさん出てきた。まず、本校の取り組んできた授業スタイルが、「単元内自由進度学習」と言えるものなのかという点である。「自由進度学習」自体が定義かされているものではないので、その判断は難しいが、どちらかといえば本校が取り組んできた実践は、「自己選択型学習」に近いと思われる。今後、単元内でどこまでを児童にゆだねるか。大きな課題が残った。

また、文部科学省の教育課程企画特別部会でも触れられているように本校も教科書「を」教える授業、「本時主義」からの脱却に至っていない。本来は、児童に「どのような力（資質・能力）を身に付けて欲しいか」という認識から出発し、そのための授業のまとまり（単元や題材）を構想し、その上で、教科書や教材をどう使い、一つ一つの授業を創っていく必要がある。ただ、それを実現するためには、かなりの指導力や時間を要する。一人で行うには限界がある。チームでの教材開発が必要になってくる。こういった教材研究の時間の確保、組織づくり、若手教員を含めた指導力の底上げなどが、今後の課題であると考えている。

次年度も「目標に向かって自ら学び続ける児童の育成」を目指し、「チーム学校」として、研究を進めていきたいと考えている。